第1回 社会学部最優秀卒業論文賞（安田賞）受賞論文

曽田邦子 高瀬さおり 中安裕子

家族システムの視点からみた中学生の無気力と家族関係：オルソン円環モデルに準拠して

「最近の若者には活気が少ない」などという10代の若者に対する大人からの批判の声が聞こえて久しい。特に大学生に関しては授業の出席率の悪さや留年現象などを特徴とする無気力症状を「ステューデント・アパシー」（Walters, 1961）とよび、研究が進められた。当初は大学生特有のものと思われていた無気力だが、研究が進むにつれ、下は思春期前期の中学生から、上はサラリーマン層にまで広く見られることがわかってきた（笹原，1973；東京都立教研究所，1985）。ところで、これまでの無気力に関する研究では個人のパーソナリティに焦点をあてたものがほとんどである。家族関係に直接焦点を当てた研究は一部の例外（北本，1990）をのぞきあまり存在しない。しかし、われわれは個人のパーソナリティの形成に大きく関わっている家族も無気力の形成や維持に大いに関係すると考えた。そこで青年期にあって、家族との関わりがいちばん深い時期である思春期前期の中学生を対象に、アパシーと家族関係の関連性について調査した。その結果、家族の状態により子どもの無気力感に違いがみられ、家族環境が子どもの無気力感の形成や維持に深く関わっているということが実証された。特に、父親や母親よりも、子どもからみた家族の「きずな」や「かじとり」が無気力に最も大きく関係していることがわかった。

本研究の調査仮説は、オルソンの円環モデルに基づいている[1]。円環モデルでは、社会システムとしての家族の健康度は「きずな」と「かじとり」の二つの次元によって決定される。「きずな」次元は〈バラバラ〉、〈サラリ〉、〈ピッタリ〉、〈ベッタリ〉に、また「かじとり」次元は〈融通無し〉、〈キッチリ〉、〈柔軟〉、〈てんやわんや〉の四つのカテゴリーに分類される。健康な家族は、「きずな」「かじとり」とも中庸な水準にあり、問題をもつ家族では、これらの次元がいずれかの方向で極端であるとする。したがって、本研究の仮説は、家族の「きずな」や「かじとり」がいずれかの方向で極端であればあるほど、中学生の無気力度が有意に高くなるというものである。

方　法

研究の第一歩として、無気力度を測定するための尺度を作成した。まず無気力に関する先行研究を参考に、無気力の理論モデルを作成した。それをもとに242項目を独自にしぼりこんで予備尺度を作成した。これを関西学院大学の学生300名に実施した。なお、そのうち約三分の一の学生は語学の再履修クラス受講者である。その結果、『無力感』『対人関係消極性』『強迫的性格』『学校不適応感』の4つの構成概念とその下に属する12の下位変数からなる58項目の質問紙（Student Apathy Measure at Kwansei Gakuin, SAMKG）を作成した。SAMKGのそれぞれの下位尺度構成概念の信頼性（α）係数は0.731から0.872で、中央値は0.825であった。

表1　SAMKGの理論モデルと項目

下位尺度（構成概念）	変数	項目番号	質問項目
『無力感』			
	「疲労感」		
		I4	体がだるいことがよくある。（順）
		I63	疲れやすい。（順）

1）オルソンの円環モデルの詳細については、武田・立木（1989）および本号掲載の平尾・福永・松岡・立木（1992）を参照されたい。

I84　なんとなく気分がすぐれないことが多い。(順)
I97　力が抜けるような感じがする。(順)
I42　何もないのにいやな気持ちになることがある。(順)
I103　体の調子は今が一番よい。(逆)
I29　しょっちゅう頭がいたい。(順)
I73　いつもゆううつです。(順)

「無感動」
I120　しらけた感じになることがよくある。(順)
I110　何をしてもあまり楽しくない。(順)
I87　興味が持てることはなにもない。(順)
I28　最近楽しいことが何もない。(順)

「あきらめ」
I54　人生とは全く偶然の積み重ねで、無意味なものである。(順)
I74　私達一人ひとりは、いわば大きな機械のとりかえのきく部分に過ぎないような気がする。(順)
I66　自分の理想を求めるのは難しい。(順)

「忍耐力のなさ」
I109　自分はねばり強い方だと思う。(逆)
I24　ひとつのことを続けることが苦手である。(順)
I121　集中力がない。(順)
I33　たいていの事にはあきらめずに取り組む。(逆)
I41　何でもすぐ飽きてしまう。(順)

『対人関係消極性』

「自信のなさ」
I39　自分に自信がある。(逆)
I59　自分は何をやってもうまくいかない。(順)
I55　自分は欠点だらけである。(順)
I23　自分は人より劣っているような気がする。(順)
I81　自分は何でも完ぺきにできると思う。(逆)
I18　自慢できるものがひとつでもある。(逆)
I32　自分はぐずでのろまなカメだと思う。(順)

「不安」
I57　自分が本当に望んでいる将来がどんなものか分からない。(順)
I6　十年後の自分はどうなっているのかと思うと不安だ。(順)
I27　大人になるのはいやだ。(順)

「消極的性格」
I3　知らない人とでもすぐ友達になれる。(逆)
I36　先に話しかけられない限り、自分から進んで話しかけない。(順)
I65　自分は無口な方である。(順)
I113　苦手なタイプの人とも話ができる。(逆)
I26　異性の友達とはうまく話すことができない。(順)

『学校不適応感』

「対教師不信感」
I5　先生を信頼できる。(逆)
I31　先生は尊敬すべきだし、またしている。(逆)
I96　先生とホンネで話し合える。(逆)
I92　先生とは表面的にしかつき合わない。(順)
I1　先生や学校にはあまり期待していない。(順)
I71　先生には何を言っても無駄だ。(順)
I99　好きな先生がいる。(逆)

「消極的授業態度」
I98　授業中ノートはきちんととる。(逆)
I94　好きな授業はほぼ理解できる。(逆)
I14　なんとなく授業を受けているという感じだ。(順)
I80　興味のある学科、授業がある。(逆)
I100　授業を最後までききとおした試しがない。(順)
I108　何のために授業を受けているのか分からない。(順)

『強迫的性格』

「几帳面さ」
I101　物事をあいまいにしておくことができない。(順)
I52　良いことと悪いこととの区別ははっきりつけなければ気がすまない。(順)
I90　完ぺきでないときがすまない。(順)
I13　物事は最後まできちんとしないと気がすまない。(順)
I25　曲がったことは嫌いだ。(順)
I15　自分の部屋はいつもきちんと片付けておく。(順)

「優勝劣敗への過敏さ」
I48　勝ち負けにはとてもこだわる方だ。(順)
I119　勝負は勝たなければ意味がないと思う。(順)
I102　私は負けず嫌いです。(順)
I61　自分は常に一番であるべきだ。(順)

表2　SAMKG下位尺度（構成概念）の信頼性係数

下位尺度	項目数	信頼性係数
無力感	20	0.872
対人関係消極性	15	0.830
学校不適応感	13	0.820
強迫的性格	10	0.731

本調査の対象は阪神間に住む中学生とその保護者である。有効回答数は、中学生が861名、その父親581名、母親766名である。無気力の尺度としては58項目のSAMKGを用いた。家族の「きずな」と「かじとり」の測定には、昨年度の立木ゼミ生の卒業論文研究で作成されたFACESKGII (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at kwansei Gakuin, 立木・オルソン式家族システム評価尺度第二版）を用いた。FACESKGIIの信頼性は、33項目の親版で「きずな」が0.77、「かじとり」が0.84、「社会的望ましさバイアス」が0.82、35項目の子供版で「きずな」が0.72、「かじとり」が0.89、「社会的望ましさバイアス」が0.85である。中学生本人にはSAMKGとFACESKGII子供版を、その親にはFACESKGII親版をそれぞれ実施した。

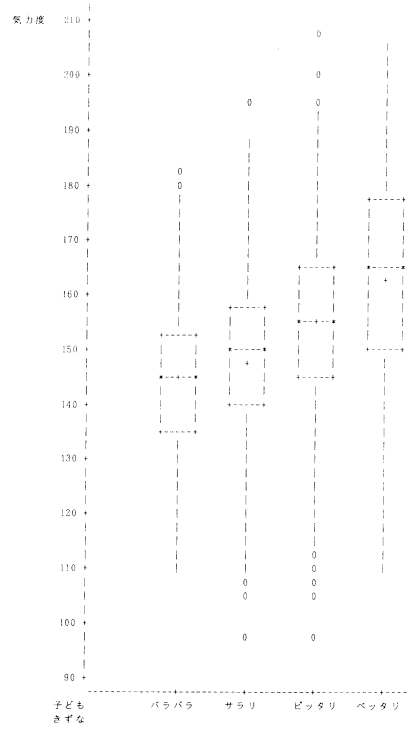

図1　子どもの知覚する家族のきずなと無気力度との関係

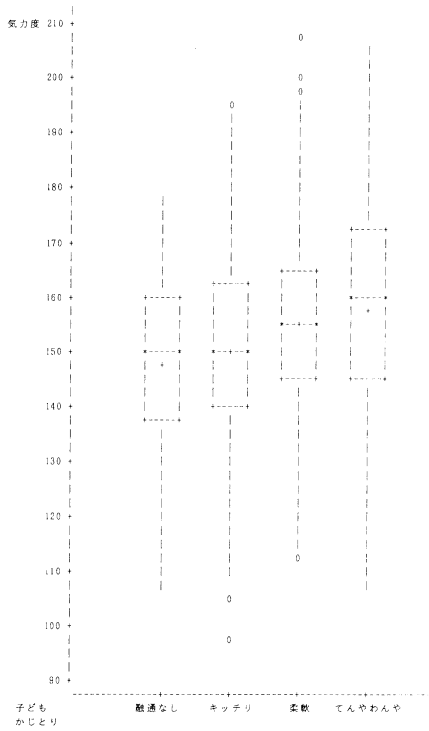

図2　子どもの知覚する家族のかじとりと無気力度との関係

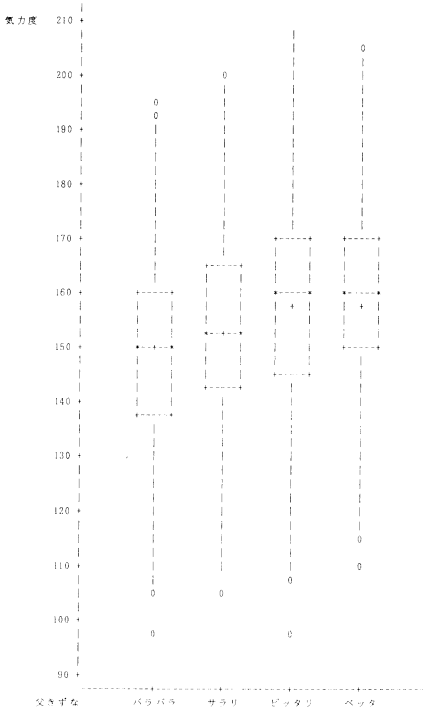

図3　父の知覚する家族のきずなと無気力度との関係

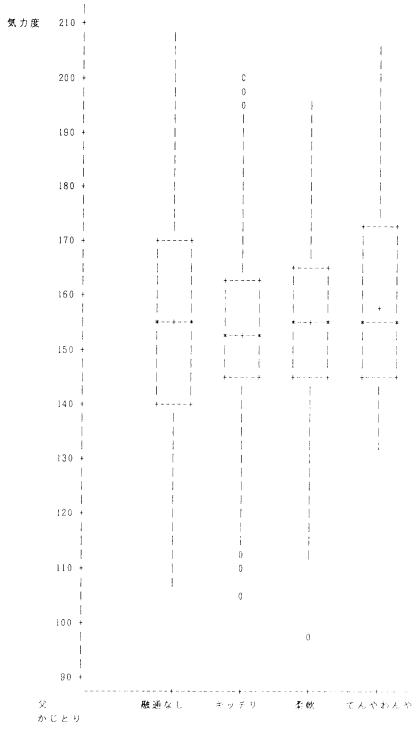

図4　父の知覚する家族のかじとりと無気力度との関係

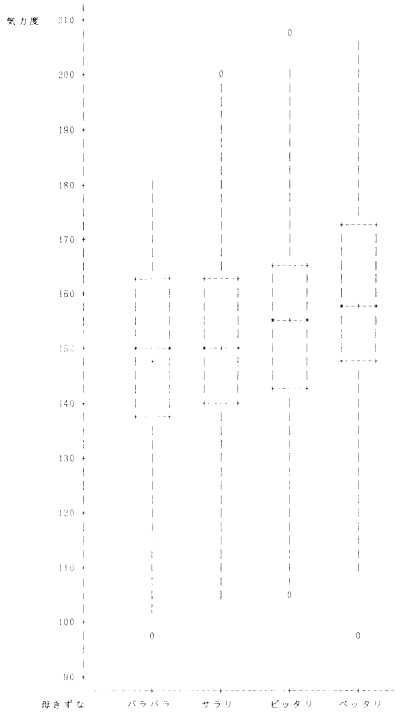

図5　母の知覚する家族のきずなと無気力度との関係

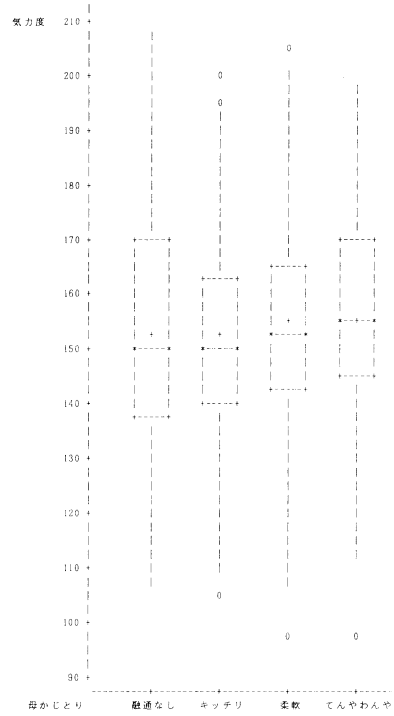

図6　母の知覚する家族のかじとりと無気力度との関係

結果と考察

調査の結果（図1から図6参照）、家族の成員間の情緒的結びつきが低くなればなるほど（きずながバラバラ）、子どもの無気力度が高くなることがわかった。前川（1991）は事例をもとに、親との関わりが希薄なときに無気力に陥りやすいと述べているが、われわれの調査はそれを実証した。中学生という時期は、自立したいと思う反面、まだ親に甘えたい、親と結ばれていたいという気持ちが強い時期でもある。つまり、自我同一性確立の途上段階でもある。無気力に陥りやすいパーソナリティーの要因に土川（1990）は、自我同一性の形成後の悪さを挙げているように、無気力というのは自我同一性と深い関係にある。そのような時期に、家族内の人間関係が希薄であったらどうであるか。自分というものを確立し、自信をもつためには家族のしっかりした「きずな」、つまり十分な愛情と支持（サポート）が必要である。それらが十分に感じられず、家族がバラバラだと感じるなら、精神的な安定が得られず、不安を感じ、子供は自分を見失い無気力になるのではないだろうか。

家族のかじとりに関しては、融通がなくなればなくなるほど、子供の無気力度が高くなった。融通なしというのは、親が絶対的なリーダーシップを握っており問題解決に対するかじとりの柔軟性が皆無の状態である。そのような家庭では、親の一元的な価値観によって子供はがんじがらめに拘束される。もしその枠組みを壊す力が子供になければ、反抗する代わりに無気力に陥ることで自己主張するのかもしれない。これはSeligmanの言うlearned helplessnessの状態である（Seligman and Overmier, 1967）。現代の子供は、中学生に限らず受験戦争というものに巻き込まれていく。しかも努力至上主義社会の日本においては、「やればできる」とか、「できないのは努力が足りないから」といった言葉が呪文のように氾濫している。こんなふうに煽られながらしかし親であるがゆえに逆らえず、“いい子”である子供達は、その期待に応えられなくなったり、挫折したとき、無気力に陥るしか逃げ道はなくなってしまうのではないだろうか。親がもっと柔軟な考え方を

し、子供が自発的に考え、決定する自由をもてるような状態をつくることが必要である。

このように、無気力に陥る原因として様々な要素が考えられるが、家族関係が中学生の無気力の形成や維持に大いに関係するということが実証された。結論として、子どもの無気力を防ぐためには子どもが自信と安心を得ることができるような家庭を築き、親自身が柔軟性をもって子どもの自発性を尊重することが必要である。

参考文献

平尾桂・福永英彦・松岡克尚・立木茂雄「オルソン円環モデルの構成概念妥当性に関する理論的・実証的検討（VI）：FACESKGII と SIMFAMKG の開発にいたるまでの研究展望」『関西学院大学社会学部紀要』、66号、1992、97－117

池埜聡・武田丈・倉石哲也・大塚美和子・石川久展・立木茂雄「オルソン円環モデルの理論的・実証的検討：構成概念妥当化パラダイムからのアプローチ」『関西学院大学社会学部紀要』、61号、1990、83－122

岩田知子・中村史子・中村三保・中山英美・長谷川千絵・原陽子・久山清子・福井操代・本佳織・安田瞳・山本寛子「FACESKGII の作成」『関西学院大学社会学部卒業論文』、1990

笹原嘉「現代の神経症－とくに神経症性アパシー（仮称）について」、『臨床精神医学 2』、1973, 153

北本裕子「中学生の無気力と家庭生活」、『大阪教育大学卒業論文』、1990

土川隆史編『スチューデントアパシー』、同朋社出版、1990

武田丈・立木茂雄「家族システム評価のための基礎概念：オルソン円環モデルを中心として」『関西学院大学社会学部紀要』、60号、1989、73－97

東京都立教教育研究所『思春期における無気力状態の解明に関する研究』、1986

前田基成「無気力な子」、『児童心理』、568号、1991、135－137

Seligman, M. E. and Overmier, J. B. "Effects of inescapable shock upon subsequent escape and avoidance learning", *Journal of Comarative and Physiological Psycology*, 63, 1967, 23-33.

Walters, P. A. Jr "Student Apathy." G. B. Blaine, Jr. and C. C. Marthur (Eds.) *Emotional problems of the student*, Appelton-Century-Crofts, 1961（笹原嘉ほか訳「学生のアパシー」、石井完一郎他鑑訳『学生の諸問題』、文光堂、1975）

SAMKG 資 料

これはテストではなく、みなさんが、ふだんどのように生活しているのかを調査するものですので、気楽に答えて下さい。

なお、このデータは統計的に処理されますので、あなたの個人名がでることはありません。それぞれの項目について、（そう思う、少し思う、あまり思わない、思わない）のうち、最もよく当てはまる番号を丸で囲んで下さい。

	そう思う	少し思う	あまり思わない	思わない
例）私はテレビを見るのが好きだ。	1	(2)	3	4
1 学校や先生にはあまり期待していない。	1	2	3	4
2 知らない人とでもすぐ友達になれる。	1	2	3	4
3 体がだるいことがよくある。	1	2	3	4
4 先生を信頼できる。	1	2	3	4
5 十年後の自分はどうなってるのかと思うと不安だ。	1	2	3	4
6 物事は最後まできちんとしないと気がすまない。	1	2	3	4
7 何となく授業を受けているという感じだ。	1	2	3	4
8 自分の部屋はいつもきちんとかたづけておく。	1	2	3	4
9 自慢できるものが、一つでもある。	1	2	3	4
10 自分は人より劣っているような気がする。	1	2	3	4
11 一つのことを続けるのが苦手だ。	1	2	3	4
12 曲がったことは嫌いだ。	1	2	3	4
13 異性の友達とはうまく話すことができない。	1	2	3	4
14 大人になるのはいやだ。	1	2	3	4
15 最近楽しいことは何もない。	1	2	3	4
16 しょっちゅう頭が痛い。	1	2	3	4
17 先生は尊敬すべきだし尊敬している。	1	2	3	4
18 自分はぐずでのろまなカメだと思う。	1	2	3	4
19 たいていのことはあきらめずに取り組む。	1	2	3	4
20 先に話しかけられない限り、自分から進んで話しかけない。	1	2	3	4
21 自分に自信がある。	1	2	3	4
22 何でもすぐに飽きてしまう。	1	2	3	4
23 何でもないのに嫌な気持ちになることがよくある。	1	2	3	4
24 勝ち負けにはとてもこだわる方だ。	1	2	3	4
25 良いこと悪いことの区別は、はっきりしなければ気がすまない。	1	2	3	4
26 人生とはまったく偶然の積み重ねで無意味なものである。	1	2	3	4
27 自分は欠点だらけである。	1	2	3	4
28 自分が本当に望んでいる将来がどんなものかわからない。	1	2	3	4

		そう思う	少し思う	あまり思わない	思わない
29	自分は何をやっても上手く行かない。	1	2	3	4
30	自分は常に一番であるべきだ。	1	2	3	4
31	疲れやすい。	1	2	3	4
32	自分は無口な方である。	1	2	3	4
33	自分の理想を求めても、実現するのは無理である。	1	2	3	4
34	いつもゆううつだ。	1	2	3	4
35	私たち一人一人は、いわば大きな機械の取り替えのきく部品にすぎない。	1	2	3	4
36	興味のある教科、授業がある。	1	2	3	4
37	自分は何でも完ぺきにできると思う。	1	2	3	4
38	何となく気分がすぐれない時が多い。	1	2	3	4
39	興味が持てることは何もない。	1	2	3	4
40	完ぺきでないと気がすまない。	1	2	3	4
41	先生とは、表面的にしかつき合わない。	1	2	3	4
42	好きな授業の内容はほぼ理解できる。	1	2	3	4
43	先生と本音で話し合える。	1	2	3	4
44	力が抜ける感じがする。	1	2	3	4
45	授業中はノートはきちんととる。	1	2	3	4
46	好きな先生がいる。	1	2	3	4
47	授業を最後まで聞き通した試しがない。	1	2	3	4
48	物事を曖昧にしておくことができない。	1	2	3	4
49	私は負けず嫌いです。	1	2	3	4
50	身体の調子は今が一番良い。	1	2	3	4
51	何のために授業を受けているのか分からない。	1	2	3	4
52	自分は粘り強い方だと思う。	1	2	3	4
53	何をしてもあまり楽しくない。	1	2	3	4
54	苦手な人とも話ができる。	1	2	3	4
55	勝負は勝たなければ意味がないと思う。	1	2	3	4
56	しらけた感じになることがよくある。	1	2	3	4
57	集中力がない。	1	2	3	4
58	先生には何を言っても無駄だ。	1	2	3	4

ご協力ありがとうございました。
関西学院大学社会学部4年　立木ゼミ
高瀬さおり　中安裕子　曽田邦子

中学生も無気力

価値観の押し付け禁物

関学大学生が調査

子ども自身に決定させて

神戸新聞1992年4月4日朝刊

家族のきずなや親の態度が影響

子どもたちの「無気力感」には、「家族の情緒的つながりの希薄さや親の価値観の押し付けが大きく影響している」ことが、関西学院大学社会学部のグループの調査で明らかになった。これまで、個人の性格と無気力感との関連を調べた研究は多いが、家族関係に焦点を当てた実証的な研究は少ない。調査の指導に当たった同学部の立木茂雄助教授(社)は「以前は無気力といえば大学生に見られる症状と思われていたが、今では広い年齢層に認められている。今回の研究では、子どもの場合、家族関係の変化によって将来起こり得る無気力を予防できることを示したのでは…」と分析している。

調査は、曽田邦子さん(三)＝豊中市＝、高瀬さおりさん(三)＝堺市＝、中安裕子さん(三)＝明石市＝の三人が卒業論文として発表。同学部で最も優秀な論文に贈られる「安田賞」を受賞した。

調査対象は兵庫、大阪の中学生とその父母の千六百三十家族で、有効回答数は八百六十一家族。

「家族間に思いやりや温かい雰囲気があるか」「家族で過ごす時間・空間を重視しているか」「家族の中で自分の気持ちを表現し、それが他のメンバーに理解されているか」―など、家族の情緒的つながりを示す(きずな)とそれに「家族内でだれがリーダーシップをとっているか」「話し合いの時に特定の人の意見ばかりが通ったり、各メンバーが好き勝手に主張したりしていないか」―など、家族の中で問題が起こった時に柔軟な対応ができるかどうか示す(かじとり)の二つの次元からみた家族機能と中学生の無気力度との関連を調べた。

その結果、「きずな」が希薄であるほど、子どもの無気力度は高く、特に、父や母から見たきずなより、子どもが自分の家族をどう見ているか―が無気力度に大きく影響。また、「かじとり」の次元では、親が絶対的なリーダーシップを握り、問題解決も親の一元的な価値観で判断してしまう「融通の利かない」家庭であるほど、子どもの無気力度も高くなる傾向にあった。

そして、きずなの希薄さと融通のなさを合わせ持つ家族では、さらに子どもの無気力感が高くなるということも分かった。

曽田さんらは「中学生と面、親との結びつきを求める気持ちも強く、親の受情や支援を感じられないと自分に自信が持てない」とし、融通の利かない家族関係では、何ごとも親が判断をくだしてしまい、子どもは自分で決定する訓練ができないのでは…」と考察。「無気力状態は、親の支配に対する無言の抵抗かもしれない」という。

「無気力症状」については、約三十年前、アメリカで留年などを特徴とする大学生に特有の無気力が「スチューデント・アパシー(学生無気力症)」と名付けられたが、その後、中学生からサラリーマン迄で広い年齢層に見られることが分かっている。

立木助教授は「素直でおとなしい子どもは大人からみればいい子だが、反抗するだけのエネルギーがないともいえる。家族関係をいま一度見直してみては…」と話している。